# 〈女人のふるさと〉鈴木よね刀自

不幸に負けず、それをバネにして、たくましくなる人間がある。鈴木商店の女あるじ、〝およねさん〟など典型だろう。

鈴木商店が、神戸の米騒動で焼打ちされたことは知られている。だが、米一升二十銭という大正八年(一九九)に、年商十六億円。三井、三菱をしのぐ大商社だったことは今では意外に知られていない。関係会社七十余。その一大王国に君臨したのが、よねである。

嘉永五年(一八五二)姫路市米田町の生まれ。一度嫁いだが、身内の不始末のとばっちりで離婚。神戸へ出て砂糖商の先代鈴木岩治郎と結婚。それも十三年目の明治二十七年、突然、夫に先立たれた、この時四十三歳。鈴木商店の飛躍は、ここに始まる。

▲姫路市米田町、鈴木よね刀自出生地

事業は、後年〝財界のナポレオン〟といわれた金子直吉と柳田冨士松の二本柱にまかせ、よねは金庫のカギとハンコだけ持って出勤した。決裁すれば、あとは一切口出ししない。店が倒れるほどの危機に遭っても「お前さんのやったことは私がしたのも同じ」と、まるで動じることがなかった。

だから攻めの金子、守りの柳田—この名コンビを軸に、社員は縦横に腕をふるった。第一次大戦のぼっ発と同時に鉄船を買い占め、物価暴騰で巨利をおさめたのを手始めに、徹底した強気の商法で、やがて国際舞台へ—。もちろん事業に浮き沈みはつきものである。よねは、それをじーっと見守った。

大正七年、米騒動で、ちょっとした誤解から店が焼き打ちに遭った時も、泰然自若平素に変り無く、又昭和二年四月二日同店破綻の前夜の如きは「エレベーターは上がり下がりがあるけど、降りる時のほうが、ちょっと気持ちわるいなあ」といったきり、動揺は毛ほども見せなかったという。

外出は、車体のでっかい車で、つねにゆっくり走らせた。ゆっくり行けば、ものがよく見える。車はイザというとき速く走れるためで、ふだんは約束の時間さえ守っていれば急ぐことはない—と。

柳田冨士松の長男・義一さん(七八)＝神戸市東灘区＝は「お家ハンは食べもんでも身の回りも質素でしたが、従業員には、こまごまと気のつく人で……。よく家で作ったナッパやダイコンを店の者に持たせて帰したり、カンナやショウブの花を持ってきて店に飾ったりしておられました。とにかく終始一貫、変わらない方でした」と追懐する。

この、細やかな心くばりと不動心が、個性の強い大集団の〝和〟を保った最大の原因—というのは先ごろテレビ番組で、よねについて語った詩人・君本昌久(四五)。

よねに二冊の歌集「波の音」「鈴の音」がある。

夏の夜は寝られぬまゝに明けはなち
胸の奥まで月さしいれぬ

君本さんは、この一首を例にあげながら

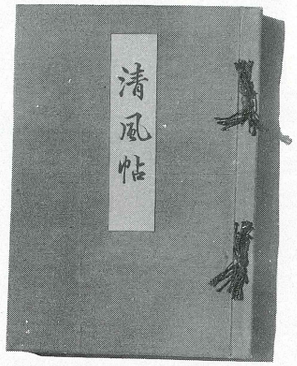
「〝女傑〟という表現では小モノになってしまう。もののあわれを知った女というか、自然と人生の、四季の心を知った女性だった。農婦がコツコツと築き上げるような生き方だが、それでなければ、もっと早い時期に鈴木は空中分解していただろう」と再評価する。

昭和二年、鈴木商店破綻。昭和金融恐慌の口火となった。しかし、鈴木はほろびたが、鈴木が育て残した事業は今も生きている。帝人、神戸製鋼、石川島播磨重工、豊年製油、東洋高圧、日商…。そして高畑誠一、大屋晋三、浅田長平、横尾竜、外島健吉、永井幸太郎、住田正一、北村徳太郎…など人材もまた、鈴木の遺産である。



# 翰墨図録「清風帖」に就いて

西川文蔵兄御収蔵の絶品の図録。自ら編纂された得難き文献である。去る明治四十五年盛夏上梓と記せられいる。限定の上、好事家知友に頒布されたものと思われる。今回計らずも元鈴木商店重役芳川筍之助氏令息義一さんのお宅に之れを見出され私の手許に迄届けられた。手に取って見て思わず驚嘆の声を発せざるを得なかったが縦二十七センチ、横二十一センチの豪華本。内容に至っては、書に中江藤樹、朱舜水、物徂徠、十時梅崖、画には渡辺華山、円山応挙、田能村竹田等々枚挙に遑がない。刊行六十数年を経た今日、この清風帖の出現は誠に喜ばしい、茲に本誌をかりて翰墨図録目次を御参考に供することにした。




## 清風帖目次

一、祝世緑　草書七絶　絹本
二、施　溥　水墨未法山水　紙本
三、張東海　草書蓮花歌七絶　紙本
四、方以智　墨竹竝題五律　金箋
五、傅　山　草書杜詩五律　統本
六、呉　彬　朱衣達磨図　紙本
七、許　宰　草書淵明詩五古　絹本
八、馮可宗　竹石雙清　統本
九、張瑞図　水墨渓煙雨図　金箋便面
十、顫道人　水墨倒籃介士図　紙本
十一、中江藤樹　行書五律　紙本
十二、朱舜水　行書夙興夜寝箴　紙本
十三、物徂徠　草書元日詩五律
十四、謝蕪村　浅絳竹渓訪友図　絹本
十五、謝長庚　淡彩松下童待主図　絹本
十六、渡辺華山　一葉墨竹　統本
十七、十時梅崖　草書宋詩七絶　紙本
十八、渡辺華山　水墨歳寒三友図　絹本
十九、渡辺華山　淡彩蜻蜓雙棲図　絹本
二十、貫名海客　水墨飛泉洗暑図　紙本
二十一、頼山陽　草書七言短古　紙本
二十二、貫名菘翁　水墨未法山水　絹本
二十三、田能村竹田　淡彩山水雨中尋約図　絹本
二十四、寧一山　墨竹竝自在七絶　紙本
二十五、逸　然　観音座像　即非贊　紙本
二十六、円山応挙　設色牡丹狗児図　絹本
二十七、龍　椿　楠公把杯図　絹本
二十八、薛　益　細楷　金箋　六幀　盛茂燁山水　金箋　六幀
三十五、項聖謨　水墨山水設色花卉帖　金箋　十幀
四十、文徴明　尺牘帖　共十四通
五十、祝允明　草書七古長編　巻　紙本
五十一、張瑞図　草書七古長編　巻　紙本
五十二、円山応挙　淡彩領中八仙図　長巻　紙本　池大雅　行書題歌
五十五、貫名海叟　草書唐詩　五絶　屏風

(5)頁よりつづく)

従来迄のソ連は国防或は戦力の充実と云う事に最重点を置きまして計画経済を遂行して参りましたが、今やソ連と致しましても、これだけ海外との人の交流が頻繁に成って来た今日、国民福祉、衣食住に亘っての国民福祉の充実と云うものを最早や軽視し得ない様な状態に立至って居る、これに関係する問題は先程も一寸申上げた所で御座います。大体時間も参りましたのでこの辺で終りにさせて戴きます。御静聴有難う御座いました。

〈50・7・29／日商岩井㈱社長〉　〈神戸新聞掲載　五〇・八・二七〉